

昭和42年3月
熊本商科大学(現 熊本学園大学)
商学部卒業

プロフィール
昭和18年、熊本市生まれ。昭和37年3月、熊本商科大学(現熊本学園大学)付属高等学校卒業。大学在学中に1年間休学し、日本学生海外移住連盟派遣商業部門の一員としてブラジルへ。昭和46年、サンパウロ新聞社東京支社長。昭和57年、ブラジル本社勤務のため家族でサンパウロへ。平成5年に専務取締役を最後に退職。ブラジル熊本県文化交流協会理事長、日本海軍新聞社ブラジル通信員、日本農業新聞特約通信員、十勝毎日新聞社国際通信員、ブラジル日本語センター顧問。本学招聘教授。著書多数あり。

ブラジル在住のジャーナリスト
Yoshitake Kusakano
日下野良武さん



明治以降の国策移住で
100万人を超える邦人が海外へ

ブラジル最初の移民船「笠戸丸」が、神戸港を出港したのは明治41年のことである。日本人791名を乗せた船は、アフリカ大陸南端を回り、約50日かけてサントス港に入港した。明治から昭和にかけて、日本政府は海外移住を推し進め、100万人を遥かに超える邦人が、ハワイやアメリカ、中国、中南米のまだ見ぬ大地に未来を託して海を渡った。中でも、日本の約23倍の国土を誇るブラジルには、平成5年まで約25万人の邦人が移住して、今では海外最多といわれる推定190万人の日系社会を形成している。今回登場するのは、そのブラジルで日伯の人的交流をライフワークに活動しているジャーナリスト、日下野良武さんである。

休学で臨んだ1年間の海外実習
それがブラジル人生の始まりに

中南米の経済成長著しい時代に少年期を過ごした日下野さんは、月謝免除の推挙生として優秀な成績で本学に進学した。熊本県は日本有数の移民県で、中南米に寄せる県民の思いは深く、丁度、日下野さんが入学した頃、大学に「中南米事情研究所」(現 海外事情研究所)が開設し、第2外国語にはスペイン語も登場していた。日下野さんも中学の同級生が移民船「ぶらじる丸」の模型をプールに浮かべ、高校の先生が「セルバス(アマゾン川流域)やパンパス(アルゼンチンの草原)に人生を賭けてみるやつはおらんか」と生徒を鼓舞していたのを思い出し、「いつか役に立つだろう」とスペイン語を選択した。その受講生を中心に、中南米事情研究所長の丸山学教授(後の第4代学長)の勧めで、学生サークル「中南米研究会」が誕生。さらに、同じ志を持つ他大学生の勧誘で「日本学生海外移住連盟」(学移連)にも加盟した。当時、日本では、まだ旅券の発行が規制され、留学か移住以外は学生の渡航が

困難であった。その時代に外務省の支援を受けて、加盟大学の学生を海外インターンシップに派遣したのが、この学移連である。日下野さんは九州でただ一人、第6次南米学生実習調査団員の選考試験に合格し、1年間大学を休学してリオデジャネイロの石川島ブラジル造船所の実習に参加した。行きは移民船「さくら丸」で36日間、帰りは「ぶらじる丸」で42日間の船旅だった。

持ち前の企画力と行動力で
東京支社を立ち上げブラジルへ

この経験が、日下野さんの人生を大きく変えた。多民族多文化が混在するブラジルの懐の深さに魅了された日下野さんは、一旦は熊本で就職するものの、ブラジル恋しさに2年で上京。その東京で、大学時代にブラジルから来ていた県費留學生で日系2世の奥様と再会した。奥様の叔父の水本光任さんは、ブラジルで邦字新聞を発行する「サンパウロ新聞社」の創業者で、その水本さんに見込まれて東京支社を立ち上げたのが日下野さんだ。当初は「縁故に頼らず自分の力で事業を興したい」と固辞していたが、水本さんの熱意にほだされ、日本橋にあるブラジル専門旅行社の片隅に東京支社を開設した。社員は日下野さんただ1人。机と電話、カメラのみのスタートだった。

世は日本の主要企業500社が、高度経済成長期のブラジルへこぞって進出した奇跡の時代。新聞紙面は要人訪伯ニュースで賑わい、日下野さんも現地の興奮冷めやらぬ社長を訪ね、ブラジル進出の意義について取材した。現地で購読される新聞とあって、面白いように広告が取れ、翌年は、消息不明の移住者を探すキャンペーンやブラジル展など、交流事業にも力を注いだ。5年で支社員は7名に増え、12年後、ブラジル本社の専務取締役に迎えられた。最盛期の発行部数6万部、社員約120名が働く本社ビルに広い役員室が用意され、ゲートボールや囲碁・将棋、俳句といった日本の文化や催事を担当。

紙面を通じて普及に努めた。

永住を誓いサンパウロ市に居を構えて約10年。50歳の節目の年に、組織を離れて自分の力を試そうと、専務取締役を最後に独立。ブラジル在住のジャーナリストとして、移民の努力の足跡を伝えようと、契約している県紙や業界誌に記事を送った。また、これまでブラジルの文化や日常をユーモアたっぷりに紹介する著書を多数出版していて、それが関係者の目に留まり、世界一周クルーズ船での7度に渡る講演依頼にもつながった。

一方、世代を重ねて多様化していく日系社会では、ブラジル日本語センターで学ぶ子どもたちの日本語離れを防ごうと「ふれあい日本の旅」を企画した。日本を知らない子どもたちが日本に興味を持てるよう、民泊による温かいもてなしで絆を深め、1カ月かけて日本を縦断した。自らのルーツを知ることで、地図の上の島国が子どもたちの故郷になった。

日伯間を往復すること約80回
海外雄飛の精神は今も健在

学生時代の渡航から約50年。テクノロジーの進歩によって、世界の距離は格段に縮まった。それでも日本とブラジルは飛行機で片道約23時間、往復で約46時間の長旅で、地球の反対側にある、世界で一番遠い国だ。その日伯間を往復すること約80回。古稀を過ぎた今でも、世界をフィールドに活躍を続ける原動力になっているのが、「時代の波に流されてブラジルへ来たけれど、偶然もここまで重なれば必然になる。日本とブラジルの交流に生涯尽くせとの天命で、運命を超えた宿命だ」という強い思いだ。

中南米事情研究所に通い、中南米研究会で大陸に思いを馳せた、懐かしくも輝かしいあの時代。そこには確かに、本学のルーツである熊本海外協会の、そして、東洋語学専門学校の、海外雄飛の伝統と気概が満ち満ちていた。その志の高さは、半世紀の時を経てなお色褪せることなく、今も変わらず卒業生と共にある。

①大学2年の春休みに1カ月で約1,600kmを走破した、自転車単身九州一周旅行。写真は北九州市の若戸大橋にて
②在学中の昭和40年。学移連派遣商業部門の一員として、移民船でブラジルへ向かう選抜生(右から2番目が日下野さん)
③サンパウロ新聞東京支社時代の昭和48年。伊勢丹デパートで開催した「世界に誇るブラジル展」で、昭和天皇・皇后両陛下に展示品を説明する日下野さん

